

ある韓国人元留学生の帰国後のキャリア形成に関する質的分析¹

李奎台

キーワード：キャリア教育、留学生の就職支援、韓国人元留学生、就職活動

1. はじめに

日本政府は、国内の留学生に、教育機関卒業後も日本で働くことを望んでいる。そのような考えは、例えば「日本再興戦略」の「雇用制度改革・人材力の強化」の取り組みの一つとして、「高度外国人材受入環境の整備」が掲げられていることから明らかである。そこには、「高度外国人材の「卵」たる留学生の国内企業（特に中小企業）への就職拡大のため、関係省庁の連携の下、情報の共有等を進めマッチング機能を充実させるとともに、先進的な企業の情報発信等を行う機会を設ける」ことが、今後の指針として明記されている（「日本再興戦略」ウェブサイトより）。そのような方針に沿うように、全国の大学など教育機関では、受け入れた留学生の就職支援の体制が整えられつつある。また日本語教育やキャリア教育の分野でも、留学生のキャリアに対する考え方や、支援体制の問題点を指摘するような研究が、近年見られるようになった。

日本学生支援機構（2021）の調査によると、日本にいる私費留学生の約65%は日本国内で働くことを希望しているとのことである。そのような留学生にとって、上のような就職支援の体制確立に向けた動きは、非常に意義のあるものだろう。一方、日本国内で就職を希望しない学生や日本で働きたいものの就職ができなくて帰国する学生についてはどうだろうか。本稿では、そのように留学を終えて帰国した元留学生の、帰国先でのキャリア形成に注目したい。

今回対象とする韓国人留学生にとっては、韓国で高等学校を卒業後に来日し、日本で大学を卒業し、卒業後は社会人として韓国で過ごすというキャリアパスが、現状一般的である。彼らは留学を終えて帰国する時期に、「学生」から「社会人」へと大きな変化を経験すると同時に、日本から韓国への地理的な移動も経験することとなる。そのような移動には、心理的な不安や葛藤も多く伴うことが予想される。留学生が日本で就職活動をする時期における心理的変容に注目した研究としては、李（2019、2021）が挙げられる。李（2019、2021）は、韓国人留学生が日本でどのようにキャリア決定をしていくか、役割意識に注目して研究した。

まず、李（2019）は、シオンという韓国人女性留学生が学部4年生のときに下した日本での就職という決定に注目し、その決定にどのような複数の役割意識が影響を与えたのか明らかにした。インタビュー内容の質的分析の結果として、労働者としての役割意識と家庭人としての役割意識が、大きく影響していたことが記述された。

¹ 本論文は、韓国日語日文学会2020年夏季国際学術大会（2020年10月24日）で「元韓国人留学生の母国でのキャリア形成に関する質的分析―帰国1年後のインタビューから―」という題目で口頭発表したものを加筆修正したものである。

次に、李（2021）は、チャンという韓国人男性留学生が留学の途中で一時帰国し経験した兵役勤務に注目して、「それまでの役割から一時的に離れる経験」が、彼のキャリアにどのように影響したのか明らかにした。チャンにとって兵役に従事した2年間は、想定外の出来事であった。そのようにして服した兵役期間の中で、チャンは自身の留学生生活を振り返る時間を得る。そして復学後は、兵役期間に考えていた行動を実行に移す。したがってチャンにとっては、兵役が内省の機会となり、その内省があったからこそ自身の留学生生活を軌道修正し、復学後に満足のいく生活を送ることができたということである。

これらの研究（李 2019、2021）では、日本に留学中の心理的変容に注目しており、留学が終わり、母国に帰ってから、彼らがどのようにキャリアを形成していくのかについては分析されていない。従来の研究はこのように留学期間中を対象とする研究が多く、彼らの卒業後のキャリア形成に焦点を当てた研究は、ほとんど見られない。その理由の一つは、日本国内での就職が優先されているという現状があるだろう。また、帰国する留学生の進路の詳細を追うことは、連絡手段やラポールの形成を考えると、決して容易なことではない。しかし、元留学生が母国、あるいは第三国でどのような生活をしており、どのように留学の経験を活かしているのか明らかにすることは、今後の留学生受け入れ政策を考えるにあたり示唆を与えてくれるだろう。

そこで本研究では、日本で留学生生活を終えた韓国人元留学生1名を対象に、彼女の留学後のキャリア形成を厚く記述することを研究目的とした。また本研究では、Super（1980）に倣い、キャリアを「学生や子ども、労働者や市民など、人が一生の中で担う諸役割の組み合わせと連続」と定義する。

2. 研究方法

それでは理論的枠組み、協力者、インタビュー調査、分析の手順について、詳細に見ていくこととする。

2.1. 理論的枠組み

本研究では李（2019、2021）を参考にし、Super（1980）が提唱した、「キャリア発達に関するライフ・スパン／ライフ・スペース理論的アプローチ（a life-span, life-space approach to career development）」を、理論的枠組みとした。

Super（1980）は、キャリアを「人生を通して、ある人によって演じられる諸役割の組み合わせと連続」と定義している。Super（1980）によると、人は複数の役割意識を持っており、「新しい役割を担ったり、古くなった役割を捨てたり、既存の役割の性質に重大な変化を生じさせたりするとき」にその都度、キャリア決定を行っているとのことである（p.291）。Super（1980）の理論では、キャリアを単なる職業ではなく、個人が経験する多様な役割とその取り組み方により構成されるものとして捉える。その上で、多くの人が生涯を通して共通して経験する役割として、「子ども」「学ぶことに従事する者」「余暇をすごす者」「市民や国民」「労働者（社会人）」「家庭人（家計を維持する者、配偶者、親など）」の役割が挙げられている。本研究では、このSuper（1980）を理論的枠組みとして、韓国人元留学生1名が帰国後どのようにキャリアを形成していくか、その際にどのようなキャリア決定を下したか、役割意識がどのように影響したのか、記述していくこととする。

2.2. 協力者

本研究ではミン（仮名）というある一人の韓国人元留学生が、韓国に帰国後就職し社会人として就労する中で、どのような経験をするかに注目する。ミンは日本に滞在していたとき、筆者と同じ在日韓国人教会に通っていた。それが知り合ったきっかけであり、同じコミュニティ内の同じ母語の者を協力者としたのは、思ったことや感じたことを自由に語るために、筆者との十分な信頼関係と母語でのコミュニケーションが有効だと考えたからである。

ミンは2010年3月に来日し、2015年2月に4年制大学を卒業し帰国した（そのうち1年間は英語研修で他国に滞在）。インタビューをしたのは、ミンが帰国して1年が経った時点（2016年3月）であった。

表1 協力者のプロフィール及びインタビュー時期

仮名	年代（性別）	来日期間（学習歴）	インタビュー時期（時間）
ミン	20代後半（女）	2010年3月～2015年2月 （大学で4年間勉学） * 英語圏留学1年間を除く	2016年3月（120分）

2.3. インタビュー調査

インタビューは、筆者が韓国へ訪問し、ミンの行きつけのカフェで120分程度実施した。インタビューは、帰国後から現在までの出来事、対人関係、職場生活について自由に語ってもらう深層面接法で行った。インタビュー内容はICレコーダーで録音し、全て文字化した。全てのインタビューは韓国語で行ったため、まず韓国語で文字化してから日本語に訳した。

協力者に対する倫理的配慮として、調査前に研究目的及び研究倫理について説明し、研究協力及び公表することの許可を得た。なお、インタビューで話した内容であってもプライバシーの侵害に繋がる恐れがあることはインタビュー後、自由に削除を要請できるようにした。この他、人間文化研究機構が定める「保有個人情報保護規程」ならびに「大学共同利用機関法人人間文化研究機構における研究活動に係る行動規範」を参照・遵守した。

2.4. 分析の手順

分析の手順は以下の通りである。

- ① 元韓国人留学生に対するインタビュー（韓国語）を行う
- ② インタビュー内容を文字化し、日本語に翻訳する
- ③ 帰国後から現在までの語りを質的分析ソフト「MAXQDA Analytics Pro 2020」を用いて分析し、「キャリア決定」に影響を及ぼした役割意識を抽出する
- ④ 上記③で抽出した役割意識を、時系列や出来事に沿ってカテゴリー化する
- ⑤ 上記①から④までの分析結果を、Super (1980) が提唱した「キャリア発達に関するライフ・スパン／ライフ・スペース理論的アプローチ」から考察する

上記の分析の手順に従ってどのように分析したか、具体例を示した後、結果に移る。以下の発

話は、ミンが日本留学を終えて韓国に帰国し、就職活動をどのように始めたかについての答えの一部である。

【分析例：韓国での就職活動の開始についての発話】

就活の初期は何も知らないから、とりあえず始めたのが、TOEIC の点数から準備しようと思って、TOEIC の勉強を始めました。

上記分析例のように、ミンは、韓国で何かからすればいいかが分からなかったとのことで、韓国国内の企業の採用試験で多く用いられている TOEIC の得点を上げることを決めたと語っていた。ここから、「英語学習者として就職活動のために英語学習に力を入れる」という出来事と、「学生（英語学習者）としての役割意識」をコーディングした。このようにインタビュー内容から見られた役割意識と関連する出来事を、ともに分析した。

3. 結果

ミンの語りから分析した結果に基づいて、ミンが帰国後どのようにキャリアを形成していたか、そのキャリア形成にどのような役割意識が影響を及ぼしたかを Super (1980) の枠組みを用いて考察した。

分析の結果、ミンの帰国後のキャリア形成は、時系列順に以下4つの段階を経て進んでいた。それは、①「韓国社会での就職活動方法を学習」、②「就職先の模索」、③「入社後インターン生活」、④「正社員生活」である。それぞれの時期のミンの主な出来事を、以下の表2に示す。

表2 ミンの帰国後からインタビューまでの主な出来事

時期	主な出来事
2015年3月～2015年4月	【韓国社会での就職活動方法を学習】 ・学部卒業後、韓国帰国し、実家（サンジュ）で生活する
2015年4月～2015年9月	【就職先の模索】 ・ソウルで就活を開始するが、うまくいかない ・就活勉強会に参加し情報を収集する ・内定をもらった会社を辞退する
2015年10月～2015年12月	【入社後インターン生活】 ・ソウルにある日系企業へ就職する ・入社後3か月間の試用期間を過ごす
2016年1月～2016年3月	【正社員生活】 ・正社員になる ・祖母が亡くなる ・所属会社を辞めずに転職活動始める

以下ではミンが韓国でキャリア形成をしていく際に、どのような困難があり、それをどのように乗り越えたかに注目し、それらに影響を及ぼした役割意識について述べる。

3.1. 韓国社会での就職活動方法を学習

ミンは約5年間海外で勉強し、韓国へ帰国後、就職活動をはじめた。まずは、就職活動をサポートしてくれるスタディ・グループへ参加し、就職活動の方法を勉強したとのことであり、「韓国社会での就職活動方法を学習する段階」と名付けた。以下に関連する語りを示す。

【語り1】 就職するための英語学習

就活の初期は何も知らないから、とりあえず始めたのが、TOEICの点数から準備しようと思って、TOEICの勉強を始めました。(中略) 就職準備をする人たちは基本的にTOEICの点数は持っているでしょう？ TOEIC点数800、900はミンな基本的に持って、就活を始めるから。

語り1のように、ミンは20代の半分を外国で過ごしており、韓国でどのように就職活動をするかがわからなかったとのことである。スタディ・グループで就職の準備としている人を見習い、まずはTOEICの高得点のために勉強を始めたという。このように韓国の就職活動に合わせて勉強をするという行動は、学生としての役割意識に影響されて生じたものと考えられた。ここから、学生としての役割意識を抽出した。

続いて、韓国で実際に就職活動をして感じたことについては、以下のように語っていた。

【語り2】 韓国の就職準備生に近づくための努力

私は日本で大学を出たというメリットがあると思いましたが、韓国の就職難がすごいんですよ。体感したら、思ったよりもっと深刻でした。(中略) 韓国で就職準備をする人は皆すでにエリート？何と言いますか。(中略) 彼らと一緒に就職準備をすることになるから、私は話にならないのです。

語り2で語られたように、韓国の就職難は思ったより深刻な状況だったとのことである。また、韓国で就職活動をしている人たちはエリートであり、日本の4年制大学を卒業したことはあまりメリットにならないと語っていた。ここでの「エリート」は、韓国でレベルの高い大学に在学している、または卒業していることを指している。

語り1と語り2で見られた通り、韓国での就職活動を始めるにあたって、ミンは自身に英語能力が足りず、韓国国内のエリート大学の出身者が就職活動には有利だという認識を持っていた。そして、周りの就職活動をする人たちとの差を埋めるために選択したのが、英語学習だった。

3.2. 就職先の模索

続いて就職先を模索する段階では、職種の選定が進められた。この段階でミンは、それまで子どもとして当たり前を受けていた両親からの経済的支援に、違和感を覚えたという。以下が実際の語りである。

【語り3】 就職活動期間中の両親の経済的支援

だんだん焦りました。実家から、父がお金を送ってくれました。「はやく就職して、はやく就職して」と。就活の初期は、どこでもいいから早く就職しようと、私がやりたいことと方向性が

同じだったら、給料は少なくともかまわないだろうと思いました。

語り3のように、ミンは子どもとして受けていた両親からの経済的支援を、負担に感じるようになっていた。そして成人として自立するために、就職活動に励むようになった。また、就職活動を進める中で、生活するために必要な費用や、興味を持つ職種に対して、徐々に具体的なイメージを持つようになっていったようである。このように就職先を模索していた時期には、子ども・成人・生活者・社会人としての役割意識が強く現れ、ミンの就職活動に影響していたと考えられた。

このように就職活動を続けていたミンは、ある日書類選考に合格し面接に行ったことについて、以下のように語っていた。

【語り4】面接試験で気づいた勤務環境の大事さ

本当に事務室が、小さい事務室で4～5人、女性たちが仕事してて、エアコンもつけずに仕事しているのです。(中略)面接官は私が入ったのに顔も見ずに、私の履歴書を見て、まるでスピードゲームをしているかと思いました。(中略)2次面接に呼ばれてまた行きました。女性の方が、どんな仕事をするか教えてくれるのです。教育期間が1～2か月だそうです。また別途教育も受けて、ここは成果給が多いから、基本給は月に100万ウォンだそうです。その代わり、働いた分稼げると。それで年俸が決まると。結局そこは行かないことにしました。

語り4のように、事務室の規模や雰囲気といった勤務環境や、試用期間や月給について語られていた。ミンが具体的にイメージしていた勤務環境は語られていないが、思ったより小さい規模、自分の経歴を見ずに「スピードゲーム」のように面接を進める面接官の態度に、がっかりしている様子であった。ここに、自分がイメージしている勤務環境で働きたいという、社会人としての役割意識が見られる。100万ウォンは日本円で10万円にならない金額である。ソウルで一人暮らしをしているミンとしては、その金額は家賃や生活費として足りない判断したのだろう。結局、この会社には就職しないこととする。このような語りには、生計を立てて自立したいという、生活者として役割意識が見られる。

3.3. 入社初期のインターン生活

就職活動を続けた結果、ミンはある会社に就職し、試用期間としてのインターン生活を送ることになった。本稿ではその時期を「入社後のインターン生活」と名付けた。ミンはマーケティング業務を志望して入社したが、マーケティング業務とITシステム業務の二つを任されることとなる。その業務内容について以下のように語った。

【語り5】自分に合わない業務内容

入ったばかりの頃は雑務ばかりやらされました。翻訳、発表資料の。始まったばかりの段階のプロジェクトだったから。私が入社して何週間経っていない時期に新しいチームができました。私は、そのチームに入れられたのです。私と同期のお姉さんがいるけど、私たち二人の能力をちゃんと把握もせずに。(中略)(私を連れ出した人もに)「これから私とミンさんがシステムの

方の仕事をするそうです」と言われました。私はパソコン音痴なのに、システムを？ ということ？ でも上の人が決めたことだから、仕方ないじゃないですか。（中略）他の人はみんなマーケティングの仕事をして、広告の仕事をしていて。

語り5のように、入社初期は雑務ばかりであったこと、また苦手であり知識も持っていないITシステム業務を任されたことについて、辛そうに語っていた。ここから、興味のある職種に就きたい、自分の能力を把握してくれる上司の下で働きたいという、社会人としての役割意識が見られた。また、入社時に志望した職種ではなかったが、「上の人が決めたことだから、仕方ない」と語っており、自分の気持ちや意見を伝えることは考えていない様子であった。

しかし、ITシステム業務が苦手であるミンはどのように働くことができたのだろうか。同じ部署で働いている同僚や上司について聞いた際に、以下のような語りを聞くことができた。

【語り6】上司との相性

直属の上司は「地方」出身の男の人で、性格が少し、怒りっぽいし、すごく…あの…すごく大変です。私を彼の隣に配置して、彼が日本語がわからないから。システム業務なのに日本語がわからないから、しょっちゅう呼ばれるのです。ミンさん、これは何ですか、と聞かれたら、それは「人気順」という意味です、と答える。そして、入社初期に日本の法人から日本人が来るから、発表したりするような仕事が多くて、軽くPPTを渡されて、翻訳してと頼まれて。私は、この業界について詳しくもないのに。

語り6のように、ミンは直属の上司との相性があまり良くないと考えていた。また、語り5で入社初期の雑務について語られたが、ここで具体的な内容が言及されていた。それは主に、日本語の翻訳及び通訳に関する業務であった。このような語りから、ミンが日本語の翻訳及び通訳業務を「雑務」と捉えており、それが望んでいる業務ではないことが分かる。このようにミンは、興味を持っていない職種に就き、大変な日々を過ごしていたが、仕事を辞めることはなかった。

3.4. 正社員生活

入社半年後、ミンは正社員として社会生活を続けることとなる。この段階を「正社員生活」と名付けた。この時期の会社生活はとてつもなく、泣いたこともあるとのことである。それについて以下のように語っていた。

【語り7】過度な業務量に関するストレス

そのとき、一気に心に来ました。6か月間私がしてきた業務に、私が向いていないこと。6か月間緊張し続けて、自信を無くして、私の直属の上司の隣で仕事してきた私の姿、みんなに私はこういうふうには扱っていいと思われていること。私に任された仕事が多いのと、「残業しないように」と言ってくれていたみんなが、私に残業をやらせて、自分たちは帰るとのこと。悔しかった。したら、やらせないでよ。仕事をさせなかったら私は少しは助かるんじゃないですか。それで泣いてしまいました。

語り7のように、ミンが会社で泣いてしまったのは、仕事の量が原因であった。任された仕事を自分で処理するために残業することに対して、上司に「残業しないように」と注意されたものの、結局時間内に仕事をすることができず辛かったという。正社員になったばかりのミンは上司に相談することもできず、ストレスが溜まる一方だったようである。

また、正社員になりたての頃にミンは、祖母を亡くしている。以下がそれについての語りである。

【語り8】 一生続けられる仕事

このことが起こる一週間前に祖母が亡くなりました。(中略) そのとき、すごく考えたのが祖母の人生でした。振り返ってみたら、かわいそうな人生でした。(中略) その後、出勤したら、そんなことが起こったのです。主任は仕事をさせて。疲れて、さびしくて。私は1月末から疲れて、疲れて、疲れて、疲れがたまったのです。今まで頑張ってきたのに、ご褒美もなく。これから一生この仕事を続けると思ったら、本当に嫌でした。

語り8に語られたように、葬式で祖母の人生を振り返り、自分のこれからの人生について考えたという。そして今の仕事を一生続けることに嫌悪感を持ったという。この経験には、頑張った甲斐が感じられる仕事をしたいという、社会人としての役割意識がうかがえる。また、この時期にミンが泣き出したのは、十分な休息が得られない日々を送り、疲れが溜まっていたのも原因の一つであった。勤務時間内に仕事を終わらせることもできず、それを誰かに相談することもできず、身も心も疲れていたことが語りから分かる。

仕事について真剣に考えるようになったミンは、それについて以下のように語った。

【語り9】 自分に向いていない現職場

本当に辞めたいと思いました。給料も少ないし。何一つなかったのです。報われることが何一つなかったのです。給料も少ないし、仕事は多いし、上司はプレッシャーをかけるし、業務内容はつまらないし。報われることがないから、何か一つでも良いことがあったら信じて進むのに、そういうのが何一つなかったのです。それで、今の仕事は向いていないのかなと、そういうパニックがきました。

語り9に語られたように、ミンは現職の給与、業務内容、対人関係に不満を持っていたことがわかる。そして今の仕事を続けたくないと考え至ったミンは、今の仕事を続けながら、転職活動をすることを決意する。以下が転職活動についての語りである。

【語り10】 自分に向いている仕事探し

大変だ、大変だと思いながら過ごしていました。そのとき、このままじゃだめだと思って。ちょうど求職サイトをみたら、出版社で求人がありまして、それが漫画の会社でした。日本の原書を読める人を探していました。それで、今まで、私が(日本の大学で)してきたのが作品を読んだりすることだったから。そして仕事が面白そうでした。ちょうどいい職場の求人情報をみたら、心が揺れました、正直。

語り 10 に語られたように、現職を辞めずに転職活動をしており、特に業務内容に重点を置いて転職活動をしていたということである。ここには、興味のある業務内容で働きたいという、社会人としての役割意識が見られる。

また、現職を辞めずに就職活動をしていることについては、以下のように語っていた。

【語り 11】 転職活動の開始²

それでどうしようか、どうしようかと悩んで、私もやめようかな。違う…どうしようと悩んで。今の会社を辞めたら、生活はどうするの、今まで貯めたお金もないのに…給料も少なかったし。今月の『家賃』もないのに。それで、こっそり履歴書を書きました。落ちたら、今の会社で耐えるしかないから、耐えてみようと思って。

語り 11 のように自分に向いていないと言いながら現職を辞められなかったのは、経済的困難が理由であった。ここから、経済的に自立して生きていくという、成人としての役割意識が見られる。

以上、インタビュー調査で得られた語りの分析を通して、ミンが韓国に帰国後にどのようなキャリア形成をしていったのか、特に役割意識に注目しながら記述した。

4. まとめと考察

ミンのキャリア形成を質的に分析した結果、どのような出来事を経験し、それにどのような役割意識が影響を与えたかが見えてきた。最後に本章では、分析結果として抽出された役割意識をまとめつつ、各段階でミンがどのような困難を感じていたのか、またどのような支援が可能なのかについて考察を進めたい。

まず「韓国社会での就職活動方法を学習」の時期に、ミンは韓国で就職するために TOEIC の得点を向上させる努力をしており、ここに「学生としての役割意識」が見られた。ここから、ミンが留学を終えて帰国後に、学生生活の延長線としてこの時期を過ごしていたことが分かる。教育機関の学生でも社会人でもないミンは、英語という課題を見つけて自律的に学習を進めていた。また学習対象としての英語は、労働市場における需要を考慮して選択されていた。

続いて「就職先の模索」の時期には、いつまでも両親から経済的支援を受けることの心理的負担を感じ、早く自立しなければという「成人としての役割意識」が見られた。また就職活動中に面接を受けた際の語りからは、勤務環境が少しでもいいところで働きたいという「社会人としての役割意識」、及び生活費について考える「生活者としての役割意識」がうかがえた。この時期は、自分の希望と実際に手の届く勤務環境や待遇との差を見つめ直し、自分の希望を再考する時間だったといえるだろう。

次の「入社後インターン生活」の時期では、相性が合わない上司との関係や残業により、心身ともに疲れがたまる日々が続くこととなる。残業することへの責任感には、任された業務は自分でこなしていくべきだという「社会人としての役割意識」が見られた。また業務の内容についても、入社時の話と違い日本語の翻訳及び通訳を多く任せられていたようであった。ミンはそのよ

² 語りの中の『家賃』は、韓国語のインタビューにおいてミンが日本語で発した言葉である。

うな業務を雑務と認識していた。ここに、労働市場での価値とミンの自己認識のずれが指摘できる。周りから見れば、日本の大学を卒業して韓国に帰国したミンに期待するのは、日本語力と日本文化への理解だろう。しかしミンの語りからは、それらの強みを韓国で活かそうという気持ちは全く聞かれなかった。そのような周囲からの期待とのずれも、ミンがインターン生活で苦勞した要因だと考えられよう。

最後に「正社員生活」では、ようやく正社員になったものの、祖母の葬式で自身のキャリアについて熟慮したことを契機に、転職活動を始めることとなる。転職活動では業務内容を重視しており、興味のある業務内容で働きたいという「社会人としての役割意識」が見られた。また、正社員をやめずに転職活動を開始するという行動には、経済的に自立して生きていくという「成人としての役割意識」も確認された。

以上が、本稿が分析対象とした期間における、ミンのキャリア形成についてである。1名のキャリア形成ではあるものの、調査が難しい帰国後の様子を縦断的に、生活者や子どもとしての役割意識も含めて厚く記述できたことに、本研究の意義があると考えている。

それでは教育の現場で、彼女のようなキャリアを辿る者に対してどのような支援が可能だろうか。具体的な提言のためにはもっと多くの者のキャリア形成を分析する必要があるが、一ついえることは、ミンの自己分析に対する支援である。分析で述べたように、ミンは就職活動を始めるにあたり、英語学習に集中する。しかしインターン以降の生活についての語りでは、業務内で英語を活用したというような語りは聞かれなかった。代わりに日本語の翻訳及び通訳業務を多く任されたのは、先に述べた通りである。ここに、ミンが自身の強みを理解していない可能性が挙げられる。当然、日本に留学し日本語に堪能な者が、帰国後もそれを活用しなければならないわけではない。どのような職種に就きどのような業務を担当するかは個人の自由であり、逆に活用したくともできない状況の者も多くいるだろう。しかし、もしミンが自身の能力の価値に気づいておらず、盲目的に周りに追従して英語学習を選択したならば、そこに気づきを促す意味はあるだろう。それに気づいていたならば、就職活動の方法や結果も変わっていたかもしれないからである。したがって、帰国先の労働市場の需要、及び自身の経験や能力を把握するための何らかの機会があればいいといえるだろう。そのような機会を教育機関が用意すべきか否か、また帰国前と帰国後のどちらにそのような機会があることが望ましいのかなどは、筆者にはまだ判断するための材料が足りない。そのような具体的な提言に結び付けられるよう、今後も元留学生のキャリアを分析していきたいと考えている。

参考文献

- 李奎台 (2019) 「韓国人女子留学生の役割意識と就職決定：ある大学4年生に対するインタビュー調査」『日本語・日本語教育』3号、49-63.
- 李奎台 (2021) 「それまでの役割から一時的に離れる経験がキャリアに及ぼした影響—ある韓国人学部留学生の兵役義務期間に注目して—」『国際日本学研究』1号、72-83.
- Super, D. E. (1980) A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 13, p.282-298.

参考 URL

独立行政法人日本学生支援機構「令和3年度私費外国人留学生生活実態調査」

<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/seikatsu/data/2021.html>（2022年11月1日閲覧）.

「日本再興戦略」改訂2015

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/dai1jp.pdf>（2022年11月1日閲覧）.

（いぎゆて 東京外国語大学世界言語社会教育センター 特任助教）

A Qualitative Analysis on Career Development of a Korean who Graduated from a Japanese University after Returning to Korea

LEE Kyutae

KEYWORDS: Career education, Support for international student's job seeking,
a Korean student that graduated from a Japanese university, Job hunting

The aim of this paper is to illustrate how a Korean international student develops her career after she goes back to Korea. The term “career” here is defined as “the combination and sequence of roles played by a person during the course of a life time” (Super 1980). Previous research has analyzed the career development of international students who work in Japan by mainly conducting questionnaires, focusing on “a worker role”. However, multiple roles seem to influence their career decision, which need to be illustrated through a qualitative method. For the aim, the data was collected in-depth interviews with a Korean who graduated from a Japanese university, using interview method that was designed to reveal her various feelings and experiences. The data from the interview was analyzed from the perspective of Super's life-span, life-space approach to career development.